

佐藤 清哉 (平成27年卒)

2022年4月から2025年3月までの3年間、国立がん研究センター東病院の消化管内科へ国内留学をさせて頂きました。同科は、消化管がんの臨床・研究において国内最高峰の施設のひとつであり、吉野副院長、設楽科長をはじめとして世界の最先端で活躍する先生方が在籍しています。そのような先生方とともに日々仕事することは非常に刺激的な経験であり、単に薬物療法の知識を得るだけでなく、広い学術的視野と常に先を見据える研究的姿勢を学ぶことができました。

留学中は消化管内科のレジデントとして病棟・外来業務に従事しながら、大学院の研究を行いました。同科には、北海道から九州まで日本各地からレジデントが来ており、それぞれ専門分野（消化器内科、腫瘍内科、消化器外科）は違いますが、ともに切磋琢磨する仲間がいたことは大きな支えとなりました。また、3年間のうち1年間は他科（放射線診断／治療科、精神科、緩和ケア科、病理診断科、内視鏡科）をローテーションすることができ、がん診療を多角的に学ぶ機会を得ました。

研究に関しては、設楽先生のご指導のもと、FGFR2b陽性胃癌の臨床病理学的因子や他のバイオマーカーとの関連についての研究を行いました。FGFR2bは、HER2、CLDN18.2に続く胃癌の新たな治療標的として近年注目されており、抗体薬としてBemarituzumabが開発されています。既に1次治療における化学療法への上乗せ効果が

第Ⅲ相試験の中間解析で示されており、今後の承認が期待される薬剤です。このような新規治療開発の背景となる研究に携われたことは、大変貴重な経験となりました。本研究については、2024年のESMOで報告を行う機会も頂き、国際学会での発表の経験を通じてさらに自分の視野を広げることができたと感じています。

国立がん研究センター東病院での3年間は大変充実しており、私の医師人生においてかけがえのない期間となりました。本報告がこれから大学院に入学する先生方にとって参考となれば幸いです。最後になりましたが、留学をご支援頂きました医局の先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

